



Title	現代日本語における接続助辞ガ・ケレドモの意味・機能と使用実態
Author(s)	齊藤, 美穂
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57865
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【8】

氏 名	さいとう みほ 齊 藤 美 穂
博士の専攻分野の名称	博 士（文 学）
学 位 記 番 号	第 23321 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 21 年 9 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	現代日本語における接続助辞ガ・ケレドモの意味・機能と使用実態
論 文 審 査 委 員	（主査） 教 授 工藤真由美 （副査） 教 授 渋谷 勝己 教 授 田野村忠温

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、現代日本語の接続助辞「～ガ」「～ケレドモ」を取り上げ、構文論的観点と形態論的観点から、2つの形式に共通する意味・機能と使用実態を分析したものである。本文123頁、400字詰め原稿用紙換算421枚よりなる。

第1部「序論」は、第1章～第3章よりなり、様々な観点から行われてきた先行研究を

精査した上で、従来の研究において手薄であった観点からの分析・記述を行うと述べる。第1は、文構造の側面から、2つの節間の関係を、対等な並列構造の場合とそうではない非並列構造の場合に分けた上で、事態（命題）間の関係を表す典型的な複文というよりもむしろ単文に近い非並列構造の場合に焦点をあてて記述することである。第2は、非並列構造の多様な意味・機能を分析するために、ひとまず接続節の品詞の違いに注目して分析した上で総合化を試みることである。

第2部「本論」は、第4章～第7章よりなり、接続節の品詞の違いを切り口にして、典型的な複文をなす並列構造の場合と比較対照しつつ、非並列構造の特徴の分析を行っている。第4章では「動詞に接続する場合」を取り上げ、言語活動を表す動詞グループでは、終止節で述べられる情報の発話場面との関係を表すという接続節の機能が前面化し、思考・認知活動を表す動詞グループでは、終止節で述べられる情報を話し手がどう確認したかを表す接続節の機能が前面化すると述べる。続いて、第5章では「名詞に接続する場合」を取り上げ、指示性の観点から名詞を下位タイプに分けた上で、終止節で話題とするものごとの指示を行うという機能が出てくる場合と、動詞と同様に、終止節で述べられる情報の確認のし方を表すという機能がでてくる場合があることを指摘する。さらに、形式名詞に接続する場合との連続性を押さえつつ、第6章では「形容詞に接続する場合」、第7章では「副詞に接続する場合」を取り上げ、どちらにおいても、終止節の内容への話し手の否定的評価を表すという機能を接続節が担うようになることを記述する。

第3部では、第2部で品詞ごとに分けて記述してきた、接続節における意味・機能の総合化を行い、典型的複文をなす並列構造の場合とは違って、非並列構造の場合には、①接続する語のタイプ、②接続節のアスペクト、テンス、極性、モダリティ、③接続節の主語の人称、④終止節の文のタイプ、モダリティという4つの面での文法的制約が、程度差を伴いつつ生じることを指摘している。最後に、今後の課題として、分析の出発点とした並列構造の分析を深化させることが重要であると述べる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、小説の会話文という限られたジャンルに留まってはいるが、実例を丹念に収集した上で、2つの事態（命題）間の関係を表すという典型的複文というよりもむしろ単文としての特徴を有する現象に注目して分析した労作である。「5人だけだが（大勢ではないが）来た」「情けないけど（残念なことだが）失敗した」「少しだが（十分ではないが）ある」のように、接続助辞「～ガ」「～ケレドモ」に、話し手の否定的評価を前面化させる機能はあるが、肯定的評価の場合には同様の用法は不適切になるということの指摘など、興味深い個別的事実の指摘も行っている。

ただし、個別的事実の指摘に留まり、なぜそうなるのかの説明が不足していると思われる。この原因は、接続節の品詞の違いに拘りすぎて、談話構造に注目した機能的アプローチが欠如していることにあり、このようなマクロな視点の欠如が、第2部「本論」と第3

部「結論」との構成上の不整合性も招いている。そもそも出発点として、並列構造と非並列構造という単純な2分割が有効なものであるかどうかという根本的問題を今後検討していく必要があるであろう。このことによって、単なる事実の指摘から、文体差も含めて、極めて多様な意味・機能を発達させている接続助辞の有り様をダイナミックに理論的に捉えることが可能になると判断される。

本論文は、このような未完成な部分を多く残してはいるが、部分的な用例だけに基づく安易な解釈に満足せず、興味深い事実を発掘・分析し、今後開拓していくべき方向性を提起した点で積極的評価が与えられるものとなっている。今後、文法構造と談話構造との相関性に関する理論的考察を行っていくことによって豊かな成果が期待される可能性を有した論文であると判断した。

よって、本論文は、博士（文学）の学位を授与するに相応しいものであると認定する。